2017年6月25日（日）

説教:「喜びと平和」

聖書:ローマの信徒への手紙15:7～13

7 節「・・・受け入れなさい」とは、自らの信仰が失わないためでもある。「受け入れる」というのは、「もの」、「結果」、「出来事」も含む。私たちは、思いがけない結果や出来事でどれだけ躓き、信仰が消えてしまいやすいものであるか。内村鑑三の言葉に、「産を失うも可なり、願わくは神の聖顔を失わざらんことを。病に悩むも可なり、願わくは神に棄てられざらんことを。死するも可なり、願わくは神より離れざらんことを。神はわがすべてなり。神を失うてわれはわがすべてを失うなり。われらに父を示したまえ。さらばたれり。わが全生涯の目的は、神を見、彼をわがものとなすにあり、その他にあらず。」自らの経験からそのことを言う。「産を失うも可なり」とは、子どもを授かると喜びは相当なものだが、しかしその授かった子が失われてしまうと、どれほどの悲しみが襲うものか・・・。内村自身も一人娘ルツ子を失った。そのようなことが起きても神の御顔を見失う事が無いようにと言うことである。

何故そこまで言い切るのか？それは７節に≪キリストがあなたがたを受け入れてくださった≫からである。イエスが私たちを受け入れた時どうなったか？罪深い私たちを受け入れたイエスは、私たちのために自らの身を引き裂くことになったではないか。あの十字架において血を流されたではないか。そのイエスのお姿を思い起こすからこそ、私も、この人を、現実の結果も、出来事も、「受け入れていく」という信仰に押し出されて行く・・・ということである。

「エッサイの根から芽が現れ、／異邦人を治めるために立ち上がる。異邦人は　彼に望みをかける」。イザヤの希望の預言である。「エッサイ」とは、ダビデの父親のこと。ここは父エッサイからダビデ王が生れたということを言いたいのではない。エッサイという羊飼いから後にキリストが生れると言うことである。ルカ福音書のキリストの誕生の知らせは、最初に羊飼いに知らされた。羊飼は当時、最も貧しい人々である。屋根の下で寝ることも許されず、常に野宿し羊の世話をして暮らす人々。彼らはその現実の貧しさを「受け入れた」人たちでもあった。そういう貧しい羊飼いに一番初めにキリストの誕生が知らされ、そしてイエスを拝むことができたのである。これは、貧しさという現実を受け入れていく中でも、希望は失われることはないというメッセージであると思う。「喜びと平和」は、どのようなところにおいても必ずなるということを、神は教えておられる。（神谷）